

通常総会

平成18年6月21日(水)午後2時30分から、ドンセンター(セミナー室)において、平成18年度通常総会を開催した。総正会員74名の過半数54名の出席となり本総会は成立した。清水理事長を議長として、議案 平成17年度事業報告および決算報告、平成18年度 事業計画案および収入・支出予算案、総会議決事項の委任ならびに役員改選は原案とおり可決された。議事終了後、日本庭園研究講座修了者に修了証書を授与した。

総会後、後藤 勇人氏により当NPOが管理運営した「おおさかフェア出展、こもれびの庭」について報告説明があり、続いて中橋文夫氏より「公園緑地のマネジメント」について講演があった。

事務局だより

□シンボルマークの審査結果について

平成18年8月24日の理事会において審査した結果、応募者は3名からそれぞれ3点の応募があった。最優秀賞に該当する作品がなく、それぞれ一点ずつを入賞として適宜使用していくことにきつた。

入賞者	馬場謙二	東村哲志	前川浩平

□「英國の庭園」出版

英国の有名な庭園、植物園の管理、研究の主任の方々が、各庭園などの特色について、それぞれの立場から詳細にまた興味深く著述されたものを、当国際造園研究センターの会員である大阪芸術大学の教授を中心に翻訳、解説された本です。日本では知られざる事が日々記載されており、

*ご購入希望者は事務局へ
お問い合わせください。

この3月に発売されました。

□新入会員のご紹介

個人正会員：堤中知子、前川浩平
友の会会員：大木修平、植田康夫、北本勝史、繁村誠人
杉江潤一郎、東村哲志、松井寿匡、
三木香織、辰巳博彦

□ご寄付

次の方々よりご協力いただきました。有難うございました。

■平成18年度
関西植木㈱ 今里忠夫 150,000円

会員の窓

ホームページを開設しました

事業内容についてのご意見など、どしどしあ寄せください! 今春早々に立ち上げたばかりで、現在は法人設立の目的が明記されているだけのとても十分な内容のものは言えません。会員諸兄姉のご意見とアイデアで充実したものにしていきたいと願っています。どんなご意見でも結構ですので「みんなが楽しめるホームページづくり」にご協力ください。

<http://www.kirs.org>

会員のご要望

- 「こもれびの庭」で行われたようなスケッチ教室をまたしてほしい。
- 新しく造られた庭や公園の植木等の育成状況や管理を見られるような企画を考えて下さい。
- 奈良のお寺の庭などの見学会もひらいてほしい。
- 幅広い年代や職種で意見交換できる場があれば楽しい。
- 海外の庭園を紹介する会が開けないか。

ご意見箱 (原稿募集)

みどりの環境に関するご意見や庭園見学会などの感想を会報に掲載することにしていますので、随時、下記のメールアドレス又は事務所までお送り下さい。

Eメール : donguri@citrus.ocn.ne.jp

<ご入会の案内>

当センターは都市緑化への協力に努めながら、造園、園芸技術の研究、研修会の開催、自然と環境問題の調査、国際交流の推進などをテーマに活動しています。関心をお持ちの方、主旨に賛同の方はぜひご参加下さい。

	入会金	年会費
個人正会員	10000円	10000円
団体正会員	50000円	30000円
賛助会員	30000円	20000円
友の会	免 除	3000円

<ご寄付のお願い>

当センターの活動をさらに活性化させるため、広く皆さまのご支援を賜りたく、ご寄付をお願い申し上げております。

□編集後記

※北欧の日本庭園づくり。レポーターの馬場さんの話には何度も驚かされました。現地は日本ブームだそうですから嬉しいような、しかし日本の実際の姿がほとんど知らない寂しさ。わがNPOの力でなんとかできないものかと、つい考えてしまいました。

※東京在住の友の会会員様からまたお電話がありました。次回の庭園見学会の開催はいつからと、熱心に心待ちにされている、というのは嬉しいものです。 藤田記

NPO法人 国際造園研究センター会報

No.4
2007
6月 発行

「ラーチャブルック2006」見聞記

昨年の11月から今年の1月までの92日間に亘ってタイ王国の古都チェンマイで国際園芸博覧会が「人類への愛」をテーマにして開催された。チェンマイは、タイの北方にあり標高も高くバンコクに比べて住みよい都市であり、百万枚の稻田を意味するランナータイと称した王国の首都であった。バンコクから遠く離れ、200年もの間ビルマに統治されていたので、独自の芸術文化が育まれてきており、今ではタイの現代美術のメッカになっている。

チェンマイの市街へと向う自動車道の植樹帯には、刈込まれたブーゲンビリアが桃色の花を咲かせ黄色の幟がはためき、博覧会の開催地らしい華やかなムードであった。黄色はプーミポン王の誕生日の月曜日の色だそうで、本年80歳を迎える在位60年に及ぶ国王を慶賀する行事の一つが、この「ラーチャブルック2006」国際園芸博である。10年前の在位50年の祝賀行事では、500万ライ(80万ヘクタール)の植林運動が展開された。その成果が徐々にあがって、また多数の国立公園が設定されて林地の保全とレクリエーション対策も進み、人々にゆとりができる、この園芸博を開催することになったのである。

会場はチェンマイ空港近くの王立農業研究所敷地内の80ヘクタールの地で、農業研究の権威である国王を慶賀するのに相応しい場所であった。会場計画もそれに優るものがあり、入場門から真直ぐにロイヤル・パビリオン・ゾーンを伸ばし、その通景の焦点にロイヤル・パビリオンがランナー風の重層の高い屋根を見せていている。その中には、タイ王国の開発、発展を表す「蓮の蕾」をモチーフにしたオブジェ「高徳の菩提樹」が燐然と輝いていた。パビリオンの周りには菩提樹が植栽されており、金の葉で飾った忠誠の菩提樹もあって、まさに「国王は仏教の徒であり擁護者である」とする上座部仏教国であることを実感したのである。

パビリオンの裏山のゴム林には知恵の宝庫があり、ゴムの木で「足るを知る経済」を営む人々の暮らしが分かるようになっていた。この自給自足のプロジェクトを讃えて、池に国王の長寿を祝う鶴島亀島を作り、知足の躰を置いた日本の出展庭園は、ロイヤルゾーンの東側の国際庭園地区にあった。ここに22カ国と京都、大阪、兵庫共同の庭園が出展されていた。それぞれの国の伝統文化芸術を活かした作庭で、中でも評判の良いのがベルギーの石と緑のオブジェの庭、入園者の多いのが日本庭園であった。その南側に、タイ国内の企業など22社が、国王の研究成果を展示する国王新理論ファームを中心にして、国王を祝賀する庭園を工夫して出展していた。ロイヤル・ゾーンの西側は熱帯庭園地区で、トロピカル・ドゥムに砂漠植物グリーン館などに蓮ガーデンと熱帯植物が集められており、またタイ文学や仏教につながる木や各地の木の展示があった。ハーブ・パビリオンではタイマッサージの実演が行われていた。地方の民家も建ちバザールも開かれ、その他、大型

形劇場、花のカーペット、タイ園芸スカイウォークなど、それぞれに趣向を凝らした施設が設けられていた。各所にあるピクニック広場には子供の遊び場があったが、大観覧車などの大型の遊戯機械がなく、グリーンタワーの展望台の高さも控えめで、2,200種350万株の草花や樹木で飾られて園芸博覧会らしいのびやかな会場であった。国際室内展示が行われたEXPOセンターでは、長期短期を含め日本をはじめ十数カ国が出展しており、とくに日本は種々の花木を使って和風の風情を醸成していたが、商売気の強い展示があり館内の雰囲気が損なわれていたのが残念であった。 清水正之



正面にロイヤル・パビリオン



池の向こうにグリーンタワーが見える

都市緑化基金との共催セミナー

「社会・環境貢献地（SEGES）と緑化の展望」

一緑をまもり育てることの大切さを再確認しました

平成18年12月1日（金）午後一時半から市内のドーンセンター特別会議室でNPO会員を集めてセミナーを開催。荒木美喜男氏（大阪府都市整備部公園課長）による緑化推進の現状報告のあと、大貫誠二（都市緑化基金専務理事）と上野芳裕（同基金調査部調査課主任）の両氏から「SEGES」（シージエス）の目指すところと、その活動状況を開いた。

＜広域緑地計画-目標は市街地の15%、府域の40%以上を＞

荒木氏はまず、平成11年に府が策定した広域緑地計画を紹介。大阪府は公共施設の緑化に力点を置くことから始め、続いて民有地、農地のため池の緑化に展開し、さらに山系、里山の森林保全をすすめていること。自然環境保全条例の改定により民間建築物の緑化が義務化されたことなど現状を紹介した。

また、本年度は府下で19番目になる府営公園の開設に向けて着手。おおむね10年後には泉佐野丘陵に新しいタイプの「景観緑地」として誕生することなどを報告した。さらに、府民協働として「みんなで育てる花いっぱいプロジェクト」を17年度には府下34校25地区で、18年度も42校25地区で緑化活動を展開、大阪都心部には森をつくる「中間の森づくり」事業の推進、すでに22回を数える「大阪府都市緑化フェア」の継続など府の担当課長として努力の一端を語った。

＜誰でもGETできる！「SEGES」の貢献地認定＞

「SEGES」はわかりやすく言えば、都市緑化基金が2年あまり前に発足させた「行動部隊」である。企業・団体などが取り組んでいる各地の緑化活動を「SEGES」が定めた3原理・8原則に照らし、専門家を派遣して審査する。つまり、「あなたが今やっている緑化活動は本当に社会に貢献していますか？」という審査である。審査の詳細は省くが、毎年6月から12月に随時受け付け、1~2月に委員会で審査、3月末までに認定する。ここでは06年度、新たに認定を受けた例をひとつだけ挙げる。京都府長岡京市にある桜村田製作所の本社敷地（緑地面積 3,625m²）は隣接するマンションに配慮して公園型緩衝緑地とし、周辺地域に調和するよう地元にちなんだ樹種を選んで野鳥や昆虫など生態系の保全に取り組んでいる。緑地管理の面でも樹木1本1本を台帳に記録して生育状況を把握するなど、「オールムラタの緑化による社会貢献」に尽くしている。

認定緑地の中で「最小面積は」という質問が出た。

上野主任の答えは、「400m²」であった。その気になれば誰でもチャレンジできそうな制度と言える。なお、このセミナーは（社）日本造園学会関西支部、（社）日本造園建設業協会近畿総支部、（社）ランドスケープコンサルタント協会関西支部、阪神造園建設業協働組合にご後援いただいた。



「タイ国際園芸博覧会見学」 チェンマイ県を訪ねて

チェンマイは、首都バンコクから北へ約710kmにあり、13世紀はじめにチェンマイ王朝の都として整えられた隣国ミャンマーとの国境の都市です。地図で眺めてみると、くっきりとした四角形が浮かび上がります。王朝時代に外部勢力から都を守るために築かれた城壁・堀であり、一辺約1800mの四角形で囲まれた地区は、旧市街地と呼ばれ、当時の繁栄を思わせる絢爛たる寺院や仏塔が大小多くあり、大勢の人々が日常的に礼拝に訪れています。実際に歩いてみると、車の通行もほとんどないような小道には日用雑貨の小さな店や観光客を迎える宿があり、住民の生活を感じられるヒューマンスケールの町並みが目に入ります。幅員の狭い旧来の道路が複雑に交じり、建物が密集した地域ではありますが、民家や店の庭先には亜熱帯地域特有の植物が濃い緑の葉を茂らせ、その背景には巨樹が枝葉を広げているように、重層的な緑の景観を合わせ持った景色が広がります。

チェンマイの寺院等には、仏教と結びつきの強い菩提樹が必ずと言ってよいほど見られ、周辺の街路や宅地に緑の潤いある風景をつくりだしています。寺院にある樹木は日本の鎮守の森と同様に大切に扱われ、大樹へと成長し、建物の屋根を越え、あるいは大きく街路へと枝葉を広げるなどして、いたるところで我々の目を引きます。一方で、旧市街地と新市街地との境目となる城壁・堀の周辺も、今では、公共広場・公園・緑道として緑豊かな空間に仕上げられ、マーケットが開かれるなど市民の憩いの場として利用されています。

旧市街地の歴史的な趣と、ビルや幹線道路が整備された新市街地の近代的な要素とが共存するチェンマイは、非常に変化に富む表情をもつ都市と言えます。「旧」と「新」が互いの個性を消しあうことなく同居し、それら新旧が隣り合い、また重なることで生じる街の風景は、チェンマイらしい独特の魅力であると感じます。

東村 哲志



街路へせり出した寺院の樹木

デンマークの造園事情

馬場 謙二

昨年2006年9月から3ヶ月間、デンマークで日本庭園修理工事及び個人庭管理に携わった。デンマークは世界的に豚肉やレゴブロックなどが有名で、人口540万人ほど。兵庫県総人口とほぼ同じですが、現在景気が良く道路工事や建設工事が盛んで、街の中ではベビーカーを押した風景がよくみられ国情は安定しているようです。

デンマークでは、思っていた以上に日本庭園や日本文化について情報が乏しい。修理工事以外に、個人庭園の剪定作業にも携わりましたが、邸主からは“ボンサイカット”と言われ、剪定との違いを説明するのも大変でした。数年手を入れていない絡み合ったモミジなどを剪定し始めるとき、手で顔を覆い恐る恐る指の間から覗き込む姿は、どの管理現場でも見られました。文化や意志の違いに戸惑いもあり、作業を止める事も度々ありましたが、剪定の仕方や剪定する理由などを、説明し実演することで次第に理解して頂きました。今まで見たことのない剪定を見て「マジックみたいだわ。すばらしい」と言いながら写真を撮る邸主をみて本当に、庭を造るだけでなく管理する剪定技術・日本の風習や文化も同時に伝えていかねばと実感しました。

日本庭園の修理工事は、日本から職人を呼び10人ほどで作業に取りかかりました。問題となった点は、重機のリース代や運搬が高額で、庭石などの造園資材や・仕立てられた植木の入手などです。日本とは異なり、段取りを組むだけでも倍の時間がかかるので、事前打ち合わせ、調査を十分しておかなくてはいけません。作業道具も、ほとんど日本より輸送しました。剪定用の梯子は、現地の丸太で山梯子を作成しました。スコップにしても、やはり使い慣れたサイズというものが、作業の進行に大きく関わってきますので、現場の作業道具についても用意しておく必要があります。

この仕事を通じて感じたことは、まだまだ海外で日本の造園技術を必要としている場所がたくさんあるということ。もちろん技術だけでなく、腰道具・剪定梯子・作業服など道具すべてに关心がありました。ドイツ・オランダ・イギリスなどには日本庭園が数多く作られていますが、それ以外の諸国では、まだまだ日本庭園を通じた日本の文化や伝統が伝わっていないと思います。

わたしは今回の北欧での作業経験を活かし、国際造園研究センターが、日本から世界に向けて造園文化・技術を発信し、そして海外の庭園の情報を受け入れる場所になるように協力していきたいと思っています。



剪定指導をする職人



個人庭管理風景



チーンプロックを使って護岸石積み



手作業での護岸作業



護岸作業風景

庭園研究会 19年度予定

茶室見学 6月30日（土）

見学地：官休庵（武者小路千家）・捨翠亭
講演：「数寄屋建築について」

秋 露地

見学予定地：弧蓬庵庭園・今宮神社
○遠州が船岡山を背景にして作庭したという庭を見る

秋

冬 町屋見学

見学予定地：町屋見学
○建築と坪庭が融合した「鰐の寝床」の町屋を見学

春

春 京の桜と庭

見学予定地：碧雲莊 他
○桜と庭との競演を楽しむ



新市街地の大通りの道路



チェンマイ旧市街地の路地

● 造園の古典「作庭記」の勉強会も予定